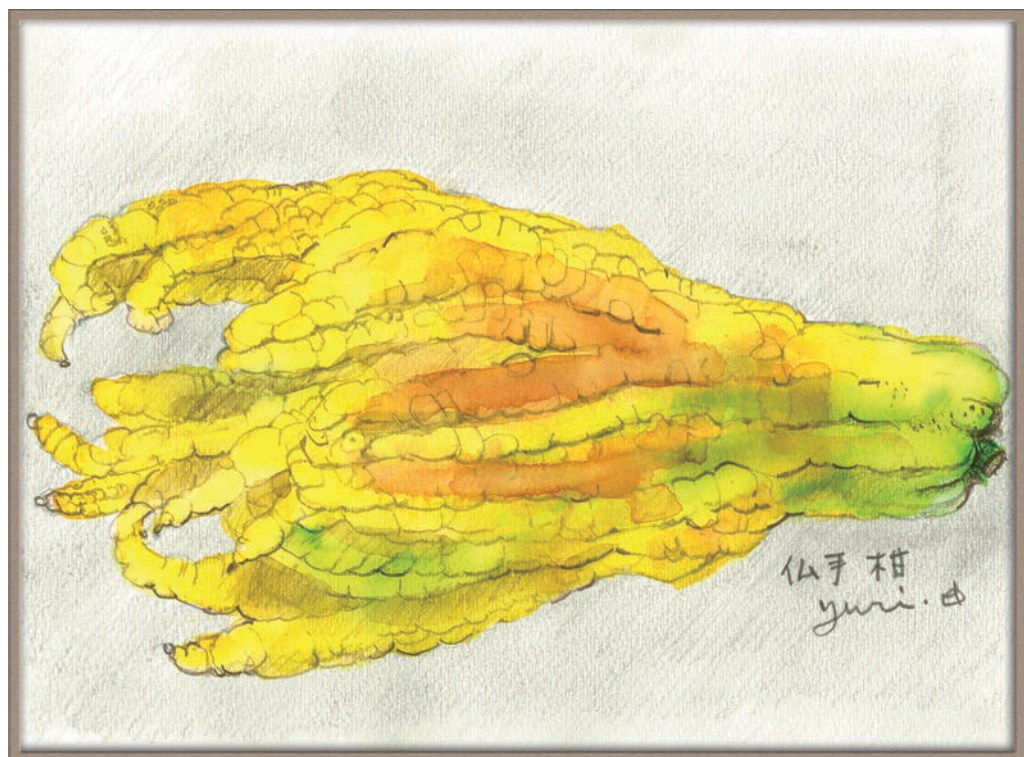


三河アララギ

平成二十八年

二月号

第六十三卷 第二号



ニューヨーク日記(112) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Muncan Food Corporation

Blue Shoe Diaries



NYの凄い東欧のMuncan って名前の肉屋さん発見! かなり昔からあるらしい。数え切れないほどのソーセージの種類やハム、全部ここで作っているんだって! 凄いよ! それに美味しい! ダックプロシュートとかパプリカサラミとか、あと出来たての豚バラ揚げ(チチャロン) がたまらない! そしてお値段も不思議なくらいお手頃! 通いそう。。。うちの近所じゃなくて良かった。。

There's this amazing Eastern European charcuterie store in Astoria called Muncan, and it's the most amazing store ever! They make everything right there in the back of the store. There's an overwhelming selection of meats but the staff is super knowledgeable and friendly. I chose about 5 different kinds of charcut and they were all fantastic and different. They also sell addictive chicharron by the scoopful. Dangerous stuff! And so the addiction began...

目次

第六十三卷第二号(通巻七四六号)

表紙・仏手柑	今泉 由利 (1)	『ことよせ』	いーはとぶ (26)		小柳千美子 (34)
ニューヨーク日記(112)	Blue Shoe (2)		牧原 規恵 (26)		川井 素山 (35)
ノボタンの窓	御津 磯夫 (4)		稲吉 友江 (26)		今泉 由利 (35)
歌集「はゝぎくさ」	大須賀寿恵 (5)		鈴木美耶子 (26)		植村 公女 (35)
歌集「草々」	今泉 米子 (6)		吉見 幸子 (26)	かさね吟行会	田中 清秀 (36)
凧の海	岡本八千代 (7)		牧原 正枝 (26)	『酔いの徒然』(46)	丸山酔宵子 (38)
個性	今泉 由利 (8)		岩瀬 信子 (27)	本からのあれこれ(3)	米田 文彦 (40)
ピナンカズラ	弓谷 久子 (9)		石田 文子 (27)	ある自然科学者の手記(45)	
熱きコーヒー	青木 玉枝 (10)		森 厚子 (27)		大橋 望彦 (42)
弓張りの	内藤 志げ (11)		山崎 俊子 (27)	絹の話(63)	今泉 雅勝 (44)
冬の足音	林 伊佐子 (12)	現代学生百人一首	三田美奈子 (27)	短歌に詠まれた茂吉	五十三回
蝸螂	安藤 和代 (13)		水野 綱子 (27)		鮫島 満 (46)
いわし雲	鈴木 孝雄 (14)		東洋大学 (28)	楽しい時間(39)	山本紀久雄 (48)
最善	清澤 範子 (15)	私の一首	伊藤 忠男 (30)	「楽しくマナー」⑧	辻 照子 (50)
へブンリーブルー	遠藤 脩子 (16)		遠藤 脩子 (31)	『歴代天皇御製歌』(四十八)	(52)
冬心	伊藤 忠男 (17)		森岡 陽子 (31)	『歴代天皇御製歌』(四十九)	(53)
絆	足立 晴代 (18)		米田 文彦 (32)	『歴代天皇御製歌』(五十七)	(54)
揺るるる	森岡 陽子 (19)	『俳句』	柳田 皓一 (32)	「氷魚」のことから(181)	岡本八千代 (55)
船形山	白井 信昭 (20)		山元 正規 (32)	再びの長塚節の生家(へ3)	夏目 勝弘 (56)
早くも	近藤 映子 (21)		山迫 京子 (33)	ことのはスケッチ(46)	今泉 由利 (57)
寿ほぎ	阿部 淑子 (22)		森岡 陽子 (33)	編集室だより(二〇一五年 十二月)	
弟	杉浦恵美子 (23)		松本 周二 (33)	三河アララギ	(58)
新藁	山口千恵子 (24)		田中 清秀 (34)	和菓子街道(112)	平松 温子 (59)
再び長塚節の生家(3)	夏目 勝弘 (25)		重野 善恵 (34)	お知らせ・三河アララギについて	(60)

ノボタンの窓（昭和二十九年〜昭和四十年） 御津磯夫

夜の虹しばらく見むと佇ちしとき野路ほそくして人に逢ひにき
ものなべて明るくきよく降る雨にこころを置きて立ち去らむとす

刈り跡にふたたび伸びし葦原の穂はなよよと風に揃ひぬ

富士の嶺の左の空にかすかなる雲のごときもの消えてゆきたり

安礼乃崎のなごりの松のひとむらも夕かぎろひの逆光の中

はひこりしふらんす菊の白花のひらききりしははなびらそよく

炎天のもえたつ野路ゆきながらわれは生きをるくさめ一つする

わが母はつひに老いつつ手震ひてその膝の上にこぼるる白粥

わが母もわれの患者のごとくしてわが掌のもとにいまか息絶ゆ

広くなりし畳にこよひただひとつ父の寢床がはやく敷かれぬ

歌集「はゝきくわ」

大須賀寿恵

ゼラニウムの赤とピンクはま盛りにて蝶舞ふ庭に洗濯物ほす

雨やみて光さし来ぬつみあげし堆肥の上に湯気立ちのぼる

スモン氏病に痛み来し足にハイヒールはきて延着列車の到着を待つ

スモン氏病の青白き手に去年作りし黒曜石の指輪は光る

転任のきみに賜ひしアメヂストの指輪を送別会にわがはめて行く

九代の副長に吾仕へ来て処世の術をいくつか学びぬ

汝がなくば吾の事務所はたちゆかずとおだてられつつ二十年すぐ

県の係長待遇だよと所長より指導主事の辞令われはもらひぬ

始めての女の係長待遇とひとびとは祝ひいふとも妬み心か

特殊児のまことのこころほほえまし菊の名記す一つ文字にも

歌集 「草々」

今泉米子

雨となる今朝はしばらくいとまあり白木蓮のつぼみ真白し

松の間の思はぬ方に枝張りて庭の櫻の花明りする

一夜明けて未だなじまぬわが麻由子抱かぬままに別れ来にけり

金鶏を埋めて築きしこの山の土乾きつつ堅香子の咲く

梅雨ふりてしとの庭に待宵の花ほのぼのとひらきはじめつ

年々におのづからなる待宵草はじめての花は大雨の中

部屋すみに包み積みおく「ははきくさ」米国議会図書館より注文が来ぬ

また二人のこりて夕べの卓にをり蛙しづまりくつわ虫なく

夕餉さへ手間のかからぬもの食べてそれより本の読めるでもない

地中海の空気を写し来しといふ余韻のごとき微熱をもちて

凧の海

蒲郡 岡本八千代

西浦の山下の海今日の凧藍ひと一色にかがやきてをり

遠々と凧の海見ゆる「広末」に集まりて今日は君ら古希の会

いつしかに君ら古希とぞ今日の会ああ西浦中学生の時の顔顔

「あ」を言へば「うん」と返事のくるごとく教師のわれも西浦弁よ

次々と子や孫のこと話してくれるわれは相槌あひづちうちつつ聞きつつ

拾いたる破れ反故紙に書かれをり「即かず離れず」なんてわが文字が

冬のダチュラまぼろし幻のごとく咲きてをり闇夜の今夜窓しめるとき

失ひし物が出で来し嬉しさよ賢治の風呂敷「日輪と山」が

わが歩み昨日より今日は少しよろし夕茜の路お菜買ひにゆく

越中の「雪の精」とふ銘菓をばいただきてその精の美しさよ

個性

東京 今泉 由利

雄葉と雌葉と等しくあるか平等か銀杏並木を調べなどして

水分子水素分子の配置にて個性をもっと雪の結晶

父母の居ませぬままにふるさとは素早く通過のぞみ号にて

逆光に富士の輪郭くつきりと太陽沈む赤赤沈む

溶岩の流れし流れその姿富士の裾野の凸凹も描き

富士山の長く長引く裾野にて白くほほけし芒を描く

思い出も現実年月ませこぜに突つ走りゆく新幹線よ

粒まるく赤々撓わに南天は京の都を赤く引きしむ

細長き路地をゆきゆく東山三十六峰たをやかにあり

右大文字左代文字それぞれの山のふもとに近付きにせけり

ビナンカズラ

豊川 弓谷 久子

戦勝の祈願のお百度参りの列の中我もゐをりき十二月八日

泣きながら飛び立ち逝けりと特攻兵を元航空隊の兄は語りき

戦友の歌一ふしを口ずさむ悲しい歌ねと子はずぶやきぬ

御庭より頂きし赤き実御津先生はビナンカズラと教へ給ひき

萬葉の歌によまれしサネカズラビナンカズラはその別名とも

冬の日ビナンカズラの朱の実があまた輝く我庭の垣

みさと二十歳の誕生日なり髪さっぱりと短く剪って招ばれていかむ

仕事より帰る母を待ちかぬるみさと背負ひて町に佇ちたりき

昔の歌が心かすめる抱きしめてともに泣きたき日もありたりと

病む夫の片へに解きぬし漢字のクイズ我が終生の趣味となりたり

熱きコーヒー

新城 青木 玉枝

歳古れば希望のぞみも夢も指折りて住みし山里余りにも侘し

山里の四季の美しさも季ときたてば都会のリズム恋しき夜々あり

ベットにて足あげ五十回今では三十回何時迄続くや続けたい

私の年きいて驚く荘の人はづかしいやら嬉しいやら

プレゼントデイと荘から頂いて胸に抱きて部屋へいそくと

集団たつきの生活終れば独り部屋折鶴ノレンくぐりて只今

部屋に帰りまず一杯の熱きコーヒー独居の部屋はきがねなく

生れ出で幼女少女青春期想い出胸に残り世の道

見渡せば耳の遠い人ばかり大声にても苦にする人なし

九十三才よくぞ生きしとわれながら仏の夫に語る日び

弓張りの

豊川 内藤 志げ

三つの花開きしカサブランカは返品と久しぶりなる友より頂く

藪沿の風を除け径柔らかく轍の間の草を踏みつつ

弓張りのなだかなる権現山紅葉班に雨上る朝

傘を手に散歩の道を向かう先吉祥山より細き雲立つ

五ひらの赤きがくに赤紫の粒実一つ臭木の秋ぞ

常の道高速道路の木々の下臭木の秋を今日見つけたり

丸まりて片寄る落葉を手に寄せて赤き袋に詰める帰りぬ

朝の径草の穂白く枯れゐるを手折りて暫く草径を行く

艶のよきコナラ二粒掌に小春和の為京の径

助手席に眺むる空はうろこ雲何処までも白果てしなく白

冬の足音

岡崎 林伊佐子

山やまを吹きくる風の冷たくて木々の揺れあう冬の足音

離村して音沙汰たえし友達を懐しく思う民家の点在

村人も老いて取らざる洪柿が何処も映えて点るがごとし

帰省して夫と取りたる八屋柿をのき場に吊せばみつ蜂よりくる

暖冬に太り過ぎたる大根を畑に埋めて保存食にする

「寒いね」と同じ挨拶かわしつつ共同畑に友と働く

娘と嫁に安産願ひて折りし鶴思いて孫にも千羽の鶴を折りたり

風寒き山家の縁に昼餉する湯呑み茶わんに手をあたたためる

帰省して登りゆきたる山の上に冷たき空気満喫をする

十二月の末は私の誕生日すこやかにして傘寿となりぬ

蠮螋

豊川 安藤 和代

軒下に八センチ程の蠮螋の動ぜずにいて師走に入りぬ

お稲荷の奥院にある狐塚その視に一瞬たじろぎており

金次郎いつしか消えて学舎に「あられちゃん」なる曲の流るる

イケメンの外交員に齡聞かれ五齡もさばをよみし吾なり

この朝百四才の生涯を閉じし御人よ山茶花の散る

夫婦別姓叫ばれし今もんもんと窓辺に二本の水仙を活く

里芋をコトコトことこと煮ておればこんな事にも幸せはある

仲よしの友の二人が喧嘩風伊良湖の浜で勝利競いぬ

仲よしは仲よしでよし引き分けて缶ビール一本分け合っており

キッチンの器は淡色萩焼きにそろえて迎春準備万端

いわし雲

沼津 鈴木孝雄

香貫山下りの道はつづら折り雪の富士山見えつ隠れつ

タチウオの目くらむような集魚灯光の進歩に魚追いつけず

金星と細い三日月早朝の日昇るまでの逢瀬楽しむ

大瀬の山の向こうに沈む夕日受け金のいわし雲眩しく光る

おばちゃんと言う名のおでん屋ほのぼのと見知らぬ客と話が弾む

今シーズン初のブロッコリー収穫す房の中にも虫が棲みいる

暖冬は悪いばかりでない事も放つたらしトマト未だ実がなる

紫のすみれの花が咲き始む春まで待てぬこの暖かさ

兄弟が揃いホームを訪ねたり母は何度も何度も子等の名を

豊橋の空き家になった玄関にシヤコバサボテン花いっぱい

最善

春日井 清澤 範子

吾が故郷さとの足助もみじの香嵐溪あなつかしや幾度の映像

足助町飯盛山のふもとに住み県有林事務所に八年勤めぬ

寡黙なる吾と思えど鳥の声聞きつつ最善家族に尽す

娘の握る吾が手は手袋の上からも伝わりくるよ暖かきかな

吾の手をしっかりと握りスーパーを廻わりし後は喫茶に憩ひぬ

喫茶に来て向ひ合ひにて吾が娘兄弟なきを淋しいと言ふ

台ふきを洗ひガス栓ギユツと締め今日一日の主婦業終る

丈低き桃の切株耕やされ駐車場にと変りゆくなり

年に一度ピアノの調達終りたりカクタスの花ひときわ紅く

気温低く八王子神社へ詣でる大木の楠に保存樹とあり

ヘブンリーブルー
蒲郡 遠藤脩子

陽に映える紅き葉揺れて見え隠れ黄に色付きし富有柿ふたつ

浜に沿ふ路の高みに下り立ちて竹島眺む和みゆく心

パン屑を放る人あり二、三十羽の鳶の群竹島橋を掠めつつ飛ぶ

平等院の鳳凰殿前大鉢に丈高く咲く藤袴清し

大鉢の藤袴を背に韓国の少女二人がスマホで撮り合ふ

十粒の朝顔の種子育ちしは一苗にしてその名へブンリーブルー

待ちかねしへブンリーブルー秋深き今朝の寒きにひと花咲けり

空の青海の青とも言ひ難きこの青まさに天国の青

咲く花は小さくなれど今朝も五つへブンリーブルーひっそりと咲く

冬心

大阪 伊藤忠男

母にとりこれが最後のふるさとか野に山に畑に懐かしき顔

あぜ道に取り残されて弱々し咲いて寂しい山茶花の花

銀色の月の光り照らされて妖しきまでにヒイラギの影

見聞き触れ足で感じる歴史旅ならこそ分かるあの時のこと

温度2度上がるを防ぐ温暖化指針ありても策伴わず

エルニーニョ巨大になりてモンスター人を襲うか雨風嵐

冷え込みもらしさと言えばらしさなり冬の始まり告げる朝方

木枯らしにちと早すぎか荒れ模様紅葉散らしの北風が吹く

この年も楽しさ喜びやさしさを重ね重ねて進む我が道

ひつじ年時を忘れてはや過ぎるマサル駆け足この年もまた

絆

東京 足立晴代

五とせを迎えりエーゼット絆も強く明るき笑顔

シャツキリ体操元気よく手足も腰も伸び々と

暖かき日続きしこの師走如何に迎えむ新玉の年を

筆持ちて猿走り書く妙演技申さると云う字を見事に書きたり

幼き日新年を迎えむ枕辺に新しき肌着おきてありたり

明るき日射し春の如しかり込み證みし松が枝さわやか

新しきプランの設計AとBといづれに軍配上るやら

スケートも世界一となりたるや神技に近し神々しくも

安らげく国治まりくにやすて永とこえに民は幸喜しゆきびありて

杉の樹多くAプラン日本の誇ほこる和の技術なり

揺るるる

東京 森岡陽子

冬の朝枝に残れる虫喰い葉冷たい風に揺るるるるる

擦れ違う男性からは甘い香が仕事はパティシエベーカリー店主

冬夕焼まるで爆発したが如富士の頂き燃て燃へつく

冬時雨肉饅餡饅の並びをるコンビニ前は素通り出来ぬ

竹徳利演歌一節温め酒下戸は憧れ焼鳥ほおぼる

妖艶な櫻の精の玉三郎舞ひの姿に拍手は止まず

茶や黄色枯葉の作るじゅうたんの模様と成して山茶花の花

ピーピーと姿突然オナガ二羽冬の木立のてっぺんで鳴く

その星はバルト三国エストニアカペラと言ふと曲はベツシヘム

八ヶ岳高原サロンでコンサート粉雪の中ピアノ流るる

船形山

豊川 白井 信昭

菊花香る晴れの日続く裏道に溝浚えせむ今日こそは

側溝の溝浚え終えてひと区切りディーゼル音止み静けさ戻る

正面に磯夫記念館通る道わが朝鮮槓垣間見ゆるとこ

照りもせず曇も果てぬ今宵また唐突に上がるラグーナの花火

雨上がり堤防の傾斜なだりに這はう枸杞くこの下枝にしとど滴光しずくれり

神石山うち越し見れば浜名湖が一望もとの下手もとにとるように

頂うみに湖遠うみく見えその先に今日の富士山見えずに下りる

堂址どうしより元堂址もとどうしに来て紅葉もみぢばの錦なりけり静けさの中

船底の形をなして稜線の屋根伝い行く「豊橋自然舗道」

昔思しるべう船形山の屋根伝しるべう自然歩道に城址しるべの標

早くも

名古屋 近藤映子

病室の窓より見ゆる東山タワーは遠く西方に光りをり

我病室は十二階はるか西北が我家の方向かと窓見る

わが体リハビリ効果の目立たずしてそれでもまずは続ける

病室にて一人原稿書き始め消灯時刻の過ぎたるに

御前中「神経伝導速度」のテスト有り左右差有りと医師

勤務後に娘は我病室に立寄りて洗濯物を届けくれたり

十二階の六号室の南の視界我家をさがしつつ緑の間に間に

リハビリの途中の空に七色の虹はつきりと理学療法士に教えられ

「不調時に何時でも来るだよ」と安藤先生有難度う

雨降りには右手の痛み強けれど明日退院の嬉しさは大

寿ほぎ

横浜 阿部 淑子

大村氏のノーベル賞を寿ことほぎて幸福の道未来に続く

一番のスカイツリーの陰長く冬至のゆず湯に体伸ばしぬ

街路樹のいちようも黄に染まる時異常高温にうなだれる葉よ

広く晴れ暖かにして夜は星と予報を聞きて心和なごみぬ

今年の漢字「安」と選ばれしひたすら願う安心の世を

弟

蒲郡 杉浦恵美子

真夜中に雨聞きながら本を読む忙しき頃には望んだ暮し

弟は煮魚なんぞ食べたっけ家族の歴史の記憶を辿る

弟とひとつ家族でありし頃それは遥かに半世紀前

弟は煮魚綺麗に食べてゐる父とよく似た箸遣ひにして

我が父は食事の度に箸遣ひ直して呉れぬ幼き我に

弟は我と異なり箸遣ひ父に直さることもなかりき

弟と我だけが知る母のことぼつぼつ語らふ師走の夜更け

弟と語りて気付く父母の記憶は微妙に異なつてゐる

華藏寺は小山の中に鎮もれり上横須賀の吉良家菩提寺

吉良公が悪役として三百年いかにも理不尽墓前に思ふ

新 藁

豊川 山口千恵子

散り落ちし皇帝ダリアの花びらのうすむらさきを踏みつつ歩む

畝を立て玉葱の苗植ゑてゆく背中に冬陽ぬくぬく受けつつ

わが庭に今年も来たりジョウビタキ梅の小枝に蕾も見ゆる

去年仕込み手作り味噌の蓋を取るかびも生えぬず香りもよろし

里芋の畝をビニールに冬囲ひ春まで土の中に眠れよ

柔らかな昼の日射しに光りゐる佐奈川堤の枯れ芒の穂

少しづつ生えゐる処移りゆくフジバカマ素枯れしを鎌に刈りとる

夕陽照る休耕田の脇の道収穫未だの大豆はぜる音

新藁の匂へるしめなは今年又手づくりして届け下さる

吊しある玉葱早も芽の出でて命の強さ青く角ぐむ

再び長塚節生家へ(3) 豊川 夏目勝弘

百余年に絶えしも残れるも新たしも森となりゐるその庭のなか
半ばより折れて生き生くカリンの木父の借財に尽ししを思ふ

次つぎに青年に羅るこもごもをこの奥庭が癒しの場所か

百余年の落葉に深く鎖とざされし心字の池をひたに見たしも

心字池の厚き落葉をこの手にて除きてみたし秋日の元へ

箒目の行き届くが節の望み落葉の厚し今も散りくる

物なべて諸行無常の内にありこの奥庭を見つづけゆきたし

満ち足りて堀中門へいじゅうもんを出でてきぬ晩秋の青に雲一つだに無し

森となり幾星霜の落葉のなかに鎮くずもる心字の池を悲しむ

この庭もいつかは無くなる定めなり今は御霊みたまの還りくる庭

『いじやよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

わが畑の小菊大菊の花の花色とりどりを手折りて墓へ
わが畑の真白大きな蕪一つわれの育てし糠床に入れむ

牧原規恵

旅行終へ我が家に帰り一瞬に安らぎ覚ゆ秋の夕暮れ
黄昏の雲眺めつつ我が心の一つの迷ひ決めかねてをり

稲吉友江

フェンス越しのスペイン階段は工事中思ひ浮かぶよ「ローマの休日」
ピノキオの小さきマリオンネット並ぶ店フイレンツエの街に買ふも嬉しく

鈴木美耶子

華道展のコンクールに参加して山ハゼと桔梗のわが取り合わせ
コンクールに我ら三人参加して熱き想ひのあふるる一日

吉見幸子

石垣の高きに碧き葛の蔓おほはれそくに農道をゆく
母のように横にならずに昼休み玉ネギ植付けはまだ三百本も

牧原正枝

寄り添いて絵本に見入る園児らよ愛ほしく思ふ今日の夕暮れ
はや親の生きたる歳をすぎにけり家に居られる我のしあはせ

岩瀬 信子

稽田ひつじに雀集まり賑々し空にはとんびの高鳴き続く

いままでは家事のいろいろこなせしに気合ひ入れつつやと踏台に

石田 文子

かるときに始めて知りぬ野ぼたんよ紫の花びら散りしく庭に

先生の庭に咲きたる野ぼたんよまだあるかなきか今宵寒かろ

森 厚子

大切な言葉伝へず別れしか二十年過ぐるもまた我に問ひて

マツムシのすずろに聞こゆこの夜よ秋も終はりかなどか寂しゑ

山崎 俊子

湯どうふの湯気のみかうには誰もぬ味も気ままよひとりの夕餉

南天の赤き実かなに置く銀色の露玉愛し朝あけにつつ

三田美奈子

夕闇に山門のみが聳えゐるああ安楽寺全ては灰に

その翼に七十年の思ひ乗せ今日の大空を往く機影美し

水野 絹子

現代学生百人一首

東洋大学

エネルギー消費し続け地球死す暮らしやすさを選んだ結果

上田西高等学校三年(長野県)

中澤 宥大

御礼など口にはしない祖父からの「ありがとうな」を聞いた死に際

上田西高等学校三年(長野県)

端 暉

「一緒には入らない」という妹に父の体がピタリととまる

飯田女子高等学校二年(長野県)

今村 珠愛

なんでだろうLINEの「好き」と口の「好き」勇気も全部違ってくるんだ。

静岡県立下田高等学校一年 大竹 渚

この魚何と聞かれてすぐわかる水高生の本領発揮

静岡県立焼津水産高等学校二年 川崎 晴也

「無視された」「まだ見てくれない」「返事して」「そんなに大事?」「既読」の二文字

光ヶ丘女子高等学校二年(愛知県) 片岡 佑奈

グラグラグラ何よりも先にスマホ取り「揺れてるなう」とつぶやく人々

名古屋国際高等学校二年(愛知県) 大島 眞琴

流行語「ヤバイ」「ウケる」を連発し暗号化する日本の会話

大阪青凌中学校三年 小西 真由

秋の日に君を思つて顔まっかきつと葉っぱも想像中だ

大阪市立北稜中学校二年 鬼丸 木実

外を見て見ないふりする大人よりすぐ席ゆずる派手な若者

兵庫県立大学附属高等学校三年 山本 祐華

私の一首

手作りのパンはまだかと見る時計酵母が香る空腹の時

伊藤 忠 男

久しぶりに手作りパンに挑戦しました。朝5時から小麦粉を練り、酵母菌を加え発酵。

手作りパンの良し悪しは、きめ細かさが練り、ふつくら感と香りが発酵です。焼く前に美味しくなるかどうかが決まります。やっと焼きの時間、時間が経つにつれ、レーズンをベースにした天然酵母の香りが部屋中に充満してきました。朝早くからの作業で、お腹はペコペコ、何回も時計を見ては焼き上がりの時間が気になります。そんな待ち遠い気持を詠みました。

大鉢の藤袴を背に韓国の少女二人がスマホで撮り合ふ

遠藤脩子

紅葉にはまだ少し早い十月末に宇治の平等院へ行った折りの歌です。はじけるような明るい声をかけ合いながら、スマホで互いを撮り合う少女たちには、同じ年格好のふたりの孫娘、蒼生あおいと若菜わかなを重ねていたのかもしれませんが。鳳凰殿で拝観したばかりの地藏尊像が、下の娘の横顔を彷彿させたので。

妖艶な櫻の精の玉三郎舞ひの姿に拍手は止まず

森岡陽子

常盤津と義太夫節の掛け合いで上演された舞踊。逢坂山の関にある庵の庭、小野小町姫の小町桜が満開。夜ふけ小町桜の精が黒染と名告り人間の姿になり現れる。見せ場は松緑のおわともものくろぬし大伴黒王と玉三郎の櫻の舞いの美しさであった。私もその妖かしい玉三郎に見惚れてしまい、拍手をやめる事が出来なかった。

『俳句』

銀幕のスターの訃報冬めく日

米田文彦

手に顔にのこる香りや冬至風呂

ひとつづつ斜線で消して年暮るる

柳田皓一

血流のよくなるまでの柚子湯かな

健康寿命知らされし日冬至かな

暖冬や坂道急ぎペダルこぐ

山元正規

五輪まで生きるつもりの日記買ふ

宅配の人にまた会ふ年の暮

湯豆腐とメールのありて帰りけり

その中の一羽は見張り浮寝鳥

山迫京子

裏道の暗がり灯す夜鳴蕎麦

バスを待つ五分の長し日短

舞台には吉良邸探る夜鷹蕎麦

森岡陽子

悠々と多摩湖に潜るかいつぶり

石段を落葉と下りる寺の鳩

チャルメラの音を寂しと言ひし母

松本周二

地の眠り光集めよ龍の玉

吾を叱る母の声とも冬の鴟

笛鳴の狭庭を挟む二重奏

田中清秀

昼めしをむすびで済ます煤払

酔ひどれて昨日に同じ夜鳴そば

吹き溜り意志ある如く枯葉鳴る

重野善恵

総仕上げ槌音せはし師走かな

三日月に眼描きたし冬の空

参道に釘打つ音も年の暮

小柳千美子

臘梅に傾きかけし日の光

埋火のかすかに息吹く夜更かな

富士を背に懸け大根の白さかな
すべり行く竹瓮小船の棹しづく
第九の音耳に残りて冬の月

川井素山

枯草に淡き光のとどまれり

今泉由利

日本に住むことにする一夜酒
寂しさも嬉しきことも夕月夜

譲られしベンチの温み冬木立

植村公女

黒白をつけたき日なり大根引く

黒猫のゆったりと行く冬紅葉

かさね吟行会

「新宿御苑」 十二月

田中清秀 吟行記
山元正規 選句

天気予報はどの位の確率で当たるものか調べてみた。気象庁では夕方五時に翌日の天気予報を発表しそれが夜のニュースで毎日放送される。予報が当たったかどうかその結果の検証が気象庁のホームページに掲載されている。結論から言うとの中率は約八十六パーセント、天気予報はあくまで予報で確実に当たるわけではない。しかし、かさね吟行会は何時も晴れる、天気予報より「晴れ女」の会員の威力は凄い。今月のかさね吟行会は平成二十七年十二月十一日新宿御苑で行われた。当日の天気予報では午前中は「雨」だったが十時過ぎにはすっかり上がり薄日が差してきた。

新宿御苑は徳川家康の家臣・内藤氏の江戸下屋敷の一部で明治に入り農事試験場を経た後に皇室の庭園となった。戦後国民公園として一般に公開され、広さは約十八万坪周囲三・五キロ、苑内はイギリス式とフランス式の庭園と日本庭園が巧みにデザインされた近代洋式庭

園である。

新宿門から入ると楓と銀杏の紅葉落ち葉が降り注ぐ。夜来の雨を受けた銀杏の葉が通路を黄色の絨毯の如くに敷き詰め差し込む日の光で輝いている。沢山のアマチュアカメラマンが素晴らしい光景に頻りにシャッターを切っていた。

雨上がり冬日に割れし雲早し 素山
 億年を繋ぐ枯葉よ公孫樹 由利

更に進むと水仙の花が咲き始めており木の下に群生している。また、十月桜も淡い白色の花を咲かせている。この花は不思議に春と秋の二回開花する、大きな水たまりに花の影が映りこくもカメラマンが取り囲んでいる。

うす日差す空の境の帰り花 清秀
 着膨れて風に大きくあふらるる 正規

風が強い、大木を揺する程に吹き付けている。ヒマラヤスギ、スズカケ、メタセコイヤの木々から木の葉が舞い散る。広い芝生の公園には人影はまばら、二人ずつが肩寄せ合って散策するそのダウンジャケットの姿はほつ

こりと暖かく感じられる。

雨上がり日差しの中は木の葉雨

陽子

季語の「木の葉雨（時雨）」は木の葉の散り続ける音を雨音に喩えた表現である。今日の御苑は木の葉が降りしきる。

日本庭園では秋を惜しむように紅葉が盛りと残り、池面に美しい逆さ絵を映し出す。また、落葉が覆う池端は風に揺れ生き物のように蠢き流れる。小休止のベンチ脇には大きな花梨の実が枯れ木に匂うが如く実り、山茶花の落ち葉が小径を飾る。梅や桜などの樹木は春ほころびる冬芽をすでに夏から秋にかけて作っていてそのまま冬を越す。冬は春の準備でもある。

大木に一輪咲きぬ寒椿

枯れ枝も春の気配を告げてをり

浩一

礼子

集合場所は御苑の大木戸門付近、各々思い思いのひとり吟行を終えて正午過ぎに皆集まり始める。門の外はすっかり師走の風情、北風が吹きすさびどことなく気ぜわしい。

ビル風にくろがり止まぬ落葉かな 千美子

句会場は「四谷ひろば」と言う旧四谷第四小学校の跡地を利用した地域コミュニティセンターで行われた。教室を利用した会議室に机と椅子を丸く並べ各自持参の昼食を取る。その後何時もの句会が始まった。五点句と四点句が一つずつ、他に三点句も四つ何時もの如く選句を終えて盛会裏にお開きとなる。新宿御苑は故喜仙主宰と共に一年を通して吟行を行った懐かしいところで本年最後の会には相応しい。さて来年は何処でどんな思い出を作る吟行会が出来るのか楽しみである。

■かさね吟行会■

日時 二月十二日（金）

場所 旧東海道品川宿

集合 京浜急行北品川駅 十一時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（四六）

丸山酔宵子

『微生物と美術とノーベル賞』

中央高速の談合坂あたりにさしかかると、鮮やかな紅葉に染まった晩秋の山々が、久々の秀麗な陽の光に輝いている。

今年も残すところあと少し、パリの同時多発テロなどの凄惨な事件で終わろうとしているが、そんな中で、我が大村智博士のノーベル医学・生理学賞受賞は痛快極まらない快挙である。葦崎市神山村で生まれ、「失敗を恐れるな」「真似をしたら人を超えることができない」を信条として励み、少年期より美術にも親しみ、日々鑑賞しながら厳しい研究の精神的な支えとしてきた。

葦崎インターから国道に下りると、沿道には「祝 大

村智博士 ノーベル賞」ののぼりが至る所に立っている。走ること10分ほどで武田家ゆかりの武田八幡宮近くの山間に、博士が40年に渡って蒐集した絵画や陶磁器などの美術品を展示している大村美術館がある。2階建ての展示室には、女子美術大学との長い関わりの中で小倉遊亀、上村松園、片岡球子、堀文子などの女流画家の絵を中心に常設展示され、入り口付近には中川一政、梅原龍三郎、安井曾太郎、鈴木信太郎などの小品もさりげなく展示されている。また敷地内には、蕎麦屋と白山温泉も併設され、地元の人たちに喜ばれている。

ワインレッドの壁と大きなガラス窓の建物からは、八ヶ岳が聳え、奥秩父連峰、霊峰富士が臨める。眼下に見下ろす中央道の先には、サントリーが世界に誇るワインナリー「登美の丘ワイナリー」が、上から段々に見事に紅葉し、太陽と自然豊かなこの地が、世界的な大学者の豊かな人間性を育んだのかと新たな感慨を覚える。因み

に、大村博士は母校である山梨大学工学部発酵生産学科助手を務めていた時代があり、その時はブランデーの製法研究に従事していた。

微生物の働きは、ワインだけではなく、食品や医薬にも欠かせないが、19世紀中旬、フランスの世界的生化学者ルイ・パスツールも、微生物を徹底的に研究し、酵母が引き起こすアルコール発酵と細菌が引き起こす有害な発酵を区別し、低温殺菌法（パストウリゼーション）を発見、ワイン造りに科学の光を当てたのである。大村博士も450種以上の微生物の生産する有用な天然化合物を発見し、世界の難病の救いとなったのだ。

ワインも酒もすべて偉大なる微生物の成せる業。それでは、今宵も良き発酵酒で一献と行きますか・・・。

見晴るかす葡萄紅葉が段々に

酔宵子

本からのあれこれ(3) 米田文彦

若い頃、会社の転勤で兵庫県北部、昔の地名でいえば但馬の豊岡市に四年間暮らしたことがある。三十歳になるかならないか、下の娘が生まれてすぐの頃だった。

政治家・斎藤隆夫、冒険家・植村直己、小説家・山田風太郎、三人とも但馬の出身である。

斎藤隆夫は出石町出身、軍事色横溢の昭和十五年、帝国議会で反軍演説を行い議員除名されるも十七年選挙妨害をはねのけて当選返り咲き。

植村直己は日高町出身、エベレスト、南極北極、マツキンリー他登頂、単独行。

山田風太郎は養父・関宮町出身、忍法帳、明治もの、室町もの等多数。八丈士の話と作者滝沢馬琴、葛飾北斎の話が交錯する「八丈伝」、よくこういうことを考えるな、という「室町お伽草紙」、「幻燈辻馬車」など。そして「戦中派虫けら日記」「戦中派不戦日記」。

こんな随筆も書いている。「日本列島を縦断する大山脈を一部を除いてみんな崩して取っ払ってしまったらどうか。冬の日本海側の豪雪はなくなり、少しは暖かくなるだろう。太平洋側のカラカラ天気はなくなり、少しは寒くなるだろうが知れたものだろう。崩した土と岩で海を埋め立てて平野を作れば国土は倍になるだろう。一部の山脈は崩さない、それは富士山と日本アルプスであつて、スキーをする地域とする」というものだ。

日本海側に住む人間は誰もが冬の太平洋側に来たときに、抜けるような青空に驚き不公平を嘆き、列島の山々・峠が無ければ良いのだと思うのだが、富士山と日本アルプスを残して、とまでは考えないのが普通だろう。このあたりが山田風太郎たる所以といえよう。

私がこの方々から受ける印象は、派手ではないが世におもねらず、考えを深めて己の信じる道を行く魅力的な人たち、というものだが如何か。

そして但馬の気候風土、霧、雪などと相まってとても懐かしい気持ちになつてくる。

いまの豊岡はコウノトリを自然の中に再生することに

成功した。気候は以前と同じでもないだろうが、どうか。姫路から播但線で帰る途中、生野の峠を越えると広い田畑に降りしきる粉雪、城崎の外湯と川沿いに並ぶ柳、玄武洞、カニの香住漁港と応挙寺、子どもと遊ぶに適當だった神鍋山のスキー、吉永小百合「夢千代日記」の温泉町、本当にきれいな海だった竹野の海水浴、モズクをバケツ一杯頂いたこともある。

豊岡から城崎温泉への道に咲いていたコスモスと、花に隠れ顔だけ出して写真に写っている妻と娘、そして豊岡の町並みと市役所近くの駐車場の一角に立つ長屋の中の、雪掻きが大変だった我が家……。

〔吟詩〕

その頃、詩吟を習ったことがある。子どもの友達から母親同志が友達へ、そして亭主同志が知り合うというパターンから始まったが、相手は詩吟の先生だった。松尾岳豊先生という。松尾さんのさわやかな艶のある美声は忘れがたい。

そして日本人もいろいろな漢詩を作っていることも

知った。西郷隆盛、頼山陽、いまは若人も。ちなみに、何かの大会で私が吟詠したのは「中庸」だった。大声を張り上げたただけだったが。

九月十三夜

上杉謙信

霜満軍営秋氣清

霜は軍営に満ちて秋氣清し

數行過雁月三更

數行の過雁月三更

越山併得能州景

越山併せ得たり能州の景

遮莫家郷憶遠征

遮莫れ家郷の遠征を憶うを

能登の七尾城を囲み酒宴を張つてこの詩を賦したという。軍神謙信の心意氣、故郷の者は遠征の我を思っているだろうがそれはそれでよい、という。しかし、残念ながら越後の謙信研究者によるとこれは謙信の作とは言えないそうだ。他に謙信の詩とされるものもないという。私はといえば「漢詩の作り方」という本を買ったこともあるが、それ以来何もせず本は空しく書棚に眠っているのみで現在に至っている。

ある自然科学者の手記 (45) 大橋 望彦

以上申し述べました様に、祖母は眼が大変良く、又針仕事も根気よく、細かい仕事も厭わず、人形作りに気分転換が何時でも出来る態勢作りを自ら作りまして、とうとう亡くなる直前の九十九歳まで製作は止めませんでした。

序にもう一つ、祖母の日常で欠かせない事が御座いました。其れは、トランプ占いです。父が大変煙草好きで、大抵其の頃出ていた『光』と言う煙草を二日二箱吸っており、其の他に葉巻やパイプも好く吹かして居りました。その『光』の空箱を何時の間にか、黙って捨てずに仕舞いおき、或る時、私の所へ持って来て、『望彦さん、お願いが有るのだけれど、この空き箱を揃えて切つて、トランプの絵を書いて御呉れでないかしら』と、言うことです。早速、要望に答えて、五十二枚のトランプが出来ました。まさかこれが十何年も使われるとは思ひも掛けませんでした。まさかこれが十何年もの模様も何も無くなり、トランプの絵柄も殆ど擦り切れて、時々鉛筆等で修正はしていた様ですが、好くもまあ使つた物だと、感心の一言で御座います。当然亡くなった時には、針箱と此のトランプは棺桶に入られました。

信州で第二次世界大戦は終戦を迎え、暫くは、帰る原宿の家も焼失してしまい、裸一貫と成つて仕舞いましたので、

其の儘で居る他御座いません。丁度、私の復学が機会となり、伯父の鈴木の家敷が本郷森川町で焼け残つて居りましたので、その内玄関付きの二部屋を借りて、姉と私が先ず帰京致しました。其れから後、続きの二部屋も借りることが出来、信州の皆と父も関西より東京に転勤となり、暫く振りに、一家全部が一緒の所で暮せるように成りました。鈴木伯父もこの状態を大変悦んでくれ、何でも便宜の計らえる事があれば、出来る事はしてあげると言つて呉れて居りました。それでも、日本全体の食糧難は此の頃が一番厳しい時代でありましたが、祖母は自分の再婚で、外に置いて来た息子とこの様に身近に住める事を事他喜んでいた様で御座います。

その後、文京区本郷に数年厄介になり、父も、東芝製鋼株の重役と成りましたので、暮らしも安定し、JRの山手線駒込駅から五分程の住宅地に土地を見つけ、其処に新しく家を建てて二家は移住することに成りました。祖母は、晩酌は欠かせませんでした。是はお銚子二本程度でした。此の後、テレビを観たり、トランプ占い（七並べだけですが）で時間を過ごし、私の帰りを待つて呉れていました。家の皆が寝静まつても、独りで起きていて呉れました。私は、大学院で実験が遅くなり、殆ど毎晩終電に近い時間に帰宅致しましたが、チャンとお膳を前に待つていて呉れます。私が

帰つてきて、一人で食事をさせるのは、気の毒と、気を使つて呉れて居たようです。私のお膳には、大きな目のお銚子にお酒が入つており、私が帰るとすぐに爛を付けて呉れていました。是は、私の相手をして呉れる事でした。ある時、『望彦さんはお酒御好きな様だが、御飯も美味ですか?』と、尋ねます。『はい、とても美味しいです』と答えますと、『其れは、結構』と、頷きます。御飯が美味しくないようなお酒は程々にしなくてはいけない、と言う論しの様であります。是は今でもハッキリと憶えて居ます。

祖母は、健康でありましたが、それには二つ理由が有りました。朝、起きる前には必ず、床の中で、『壺、忒い、壺忒い壺』と、軽い手足の運動をしてから起き上ります。是れを欠かした事は御座いません。誠に理に適つた軽い運動だと思ひます。即ち、起き上がる前に血行を良くしてから、徐々に頭を持ち上げることは、脳溢血の予防となるからであります。祖母は是れを意識してかどうかは判りませんが、毎朝、此の掛け声は続いておりました。

この様な祖母でしたので、お互いに何でも話し合せておりました。然し、何故、此のことを聞いて置かなかつたのだからと、大変残念に思っている事が只二つ御座います。是は大橋家の事でありますので、ここで云々することは控えようかと存じましたが、敢えて御話致します。と、申しますのは、

実は、『大橋家の家紋』は、全く『毛利家の家紋』と同じなのです。彼の有名な、一に三ツ星の紋所であります。此の家紋はシンプルである故に派手に良く判る家紋と言えましょう。それだけに、冒頭で申しました、『官軍』と『賊軍』と言う仲の会津出身者と、長州の家紋を翳す、松本出身者との縁組は、果たしてどの様な了解が成立したので御座いましょうか。それには、多分想像を超える話しが潜んでいたのに違ひないと存じます。其れがどうしても切り出せないうちに、祖母は他界致してしまいました。沢山御座いました資料も、戦災で全て灰となつてしまい、最早これは、解決の致し様も御座いません。この様な事は、滅多に無い事と存じますので後は、是をネタとして、想像を巧みにして、歴史的事実の繋ぎ合わせと、時代考証とを以つて、ストーリーを考え出す他は御座いません。其れは、此処では控えましょう。只この書の冒頭で申しあげた、一切の長州軍と、会津軍との関係を先ず、無視して頂いてから、お読み戴きたかつたのは、実はこの様な事情が在つたからであります。

さて、この様な祖母も豊島区駒込の地で亡くなりました。遺骨は台東区下谷にある谷中の東京都霊園にある大橋家の墓に安置されたので御座います。不思議な事に、大変お世話になつた野田豁道様のお墓の傍でも御座いました。

絹の話 (63)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

オオミズアオ

【オオミズアオに出会う】

12月10日東京有楽町のジャパンシルクセンターの「絹まつり」をしている昼頃ビルの軒下の低い植込みのまわりが騒がしくなっていました。

そのうちにシルクセンターの店長が呼ばれましたので、私も後ろについて行きました。人だかりで歩道も通れないほどになっていました。皇居から昨夜のうちに飛んで来たのでしょうか。

植込みの葉の上に見た事もない、竜宮城からやって来たかと思われる薄緑で美しい優雅な蝶、蛾？がいるではありませんか！絹を作るのも蛾の一種だから、店長なら知っているかと皆から尋ねられていましたが、店長も腕を組んでいるばかり。私は日本野蚕学会で度々写真で見えて知っていましたので。「これはオオミズアオと云う蛾ですよ」と言つて、持ち合わせたオオミズアオの繭をそばに置くと、皆一齐にスマホで



写真をとり始めました。

そして名前をメモする人、会社に写真機を取りに行く人などで盛り上がり、中にはその食性や生態を質問してくれる人もいて、暫く辻舌鋒の様な状態になってしまいました。若い女性は普通の蛾を見ただけで気持ちが悪いといつて近寄らない事が多いのですが、この蛾に限って頬ずりせんばかりのモチモチぶり。同じ姿でもっと大型で羽が濃黄で4つの赤い丸模様と斑点のある銀繭を作るアゲマミトレイ（マダガスカル）の蛾は色彩としてはまことに美しいのですが敬遠されています。

やはり毒々しい様な色や模様ではなく、やや淡白で容姿端麗な事は大切な事と思うことしきりでした。この生きた蛾を持ち帰りたい人はいない様でしたので、私が菓子箱にサランラップを貼つて持ち帰りました。アトリエの蛍光灯の下では微動だにしませんので、そのままにして、翌朝見ると長い尾が切れて落ちているではありませんか！標本にするのを諦めました。

明りの下ではついても身じろぎする程度で動きません。次の朝見ると羽の下部がボロボロになってしまいました。暗くすると勢いよく箱の中でバタついて羽がどんどん切れて、余命尽きる迄2週間の内に1/2になってしまいました。私

のせいで子孫を残す事が出来なかったであろうか：

【オオミズアオとは】

北海道から九州に生息し、幼虫はバラ科、ブナ科、カバノキ科、クルミ科などを食べる食性の広いチョウ目、ヤママユ蛾科の絹糸昆虫です。私は郷里の三河でも東京でも見たことはありませんでした。話を聞いた東京渋谷の人が「自分の家の庭にいたよ！」と云うので、皇居や神宮の森で大量発生したのかもしれないと思うのです。

成虫は年2回発生し、繭で越冬します。夏の繭と冬の繭では繭を作る場所が違うという面白い性質を持っています。春に羽化した幼虫は、餌になる木の樹上で葉を綴って繭を作りますが、夏に生まれた幼虫は餌植物から降り、地表の落ち葉を綴って繭を作ります。

冬の里山散策などの時、食性樹の下の落ち葉の中の繭を探してみるのも楽しみです。

繭は濃茶色で薄く油紙のようでペコペコしています。この蛾は北海道には沢山いると云う人がいますが、この繭を使って野蚕絹布を織った報告は有りません。

この昆虫の生態などは研究されているようですが、繭の物性などは殆ど解明されていません。

数千万年の歳月をかけて進化して来た命を守る生命のカプセルにこれからの人類が利用出来るどんなメカニズムが隠されているか解りません。生物の進化は長い々年月をかけた突如とした遺伝子組み換えと云う突然変異の中の有効な物が残されて来たのです。現在では必要な遺伝子を他の生物の遺伝子の中に組み替える事が出来るので、意外な有効利用が見つかるか解りません。

【ムンギアオ】

ちよつと見た目にはオオミズアオにそっくりな蛾にオナガミズアオがいます。燕尾服の様な尾が少し長いだけで、生息分布、姿も羽の色や大きさも殆ど同じです。葉にとまってる時、オオミズアオは両翼がほぼ水平なのに比べて、オナガミズアオは万歳した様な逆八の字になります。ハンノキやヤシヤブシなどを食べて食性はやや違いますが、羽化も営繭も同じです。

長い自然の営みの中で、ほんの僅かなDNAの違いは何を意味しているのでしょうか。

恐竜絶滅後、花の咲く植物と昆虫、哺乳類は相携えて進化して来た事を考えれば、昆虫に教えられる事はまだまだ沢山有りそうです。

短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 五十三回

「月虹」 鮫島 満

二十四 金子阿岐夫 5

四十年前茂吉と父を心厚く迎へし酒田にわれは来に
けり 『路地の坂』 昭和六十二年

昭和二十二年四月、金子の父板垣は茂吉の供として酒田へ三泊の旅行をしている。この時のことを板垣は『随行記』に詳細に記録しており、右の一首はそれを踏まえている。板垣によると、泊まる予定の宿の主は満室であることを詫びた上で他の宿を紹介し「丁寧に道順を教えてくださいました」、その宿では「瀬戸火鉢を置いて炭火もおこされ、そして卓子の上には茶器も揃えてあった」という。これは今では特別なことではないと思うが、敗戦後間もなくのその頃では気の利いたことなのであったろう。

先生にあひまつりしを此の上なき幸ひとして古稀を
むかへぬ 『従ひし道』 平成八年

作者が初めて茂吉に会ったのは昭和二十年八月、敗戦

の直後、陸軍幼年学校から大石田の実家に帰った時であった。その後、茂吉と同じ医学の道に進んできたのであった。作者は度々茂吉と出会ったことを人生の幸運として語り、詠んでいる。

老いし歯を嘆き給ひしかの時のみ歯をわれは七つも
越しぬ 同

茂吉が歯の痛みを嘆くようになり、父の板垣はその昭和二十二年のことを、「『老いし歯』は造語ならむと言ひをりし茂吉先生にその歌二つ」「牛の肉噛むに痛むをなげかれて老いし歯の歌成させ給ひし」（『湧水』）と詠んだのであった。

命生きむと茂吉に瀬見の三夜ありき老の皺腹と冗談
言ひて 同・平成九年
茂吉先生の眠り妨げし酔ひどれらいまは如何なる老
になり居む

茂吉は昭和二十一年十月、板垣と共に瀬見温泉に行った。その時のことを板垣は「瀬見温泉」と題して数首を詠んだ。右の一首目はそのうちの「湯の中に皺立ちし腹撫でる給ふ君がとよ生にわれは触れしか」「峡の温泉ゆに病みしみ命養へる師とありありて三夜のたふとし」（『磔

底」を踏まえている。

二首目は団体客の騒ぎがひどかったことに触れている。茂吉はそれを日記に「昨夜、石巻ノ団体客酒ヲ飲ミ、終夜サワギ、便所ニ嘔吐シタリシテ何トモ致シカタガナカツタ、夜半ニ入浴シタリシテ辛ウジテ眠ツタ」と記している。

三十年の木々のしげりは谷汲の歌碑に蔭せり読みが
たきまで
同・平成十一年

昭和四十五年に、岐阜県谷汲村華嚴寺境内に建てられた茂吉の歌碑を詠んでいる。歌碑には「谷汲はしつかなる寺くれなるのうめ干しぬ日のくるる迄」(『白桃』昭和二十三年作)が刻まれている。

居間の空気動くを厭ひ見えぬまで炭火を灰に埋め給
ひき
『川の辺』平成十四年

春を待つ心あそびに鶯の鳴真似をせし茂吉思ほゆ
同・平成十五年

聴禽書屋での茂吉を詠んでいる。一首目。茂吉はどんなに寒くても火鉢の燠を灰に埋めたことで知られる。作者は自ら、或いは父に代わって茂吉の部屋を訪ねることが何度もあった冬は寒い思いを味わっていた。二首目は

あまり語られてこなかった茂吉の一面であろう。

鰻すらあぶら濃すぐと嘆きしは六十五歳はやく老い
ましき
『是非に及ばず』平成十九年

鰻好きで知られる茂吉が「ひと老いて何のいのりぞ鰻すらあぶら濃過ぐと言はむとぞする」(『つきかげ』昭和二十三年)と詠んだのはまだ六十五歳の時であった。作者の思いは結句にある。

蚤捕ると指を舐め舐め構へしがおよそしくじりし茂
吉思ほゆ
同・平成二十三年

蚤は茂吉の天敵であった。その蚤との格闘を作者は幾度も見ていたのである。

心にはありて詣でぬ幾年か大石田の墓金瓶の墓
『新世界』平成二十五年

山形県南陽市に暮らす作者は八十六歳になつていて、同じ県内に建つ二つの茂吉の墓にもなかなか詣でることができないことを嘆いているのである。大石田の墓は第三の墓として昭和四十八年に乗船寺境内に建てられた。

楽しい時間 39

山本紀久雄

2015年12月30日

パリの審判 (3)

パリでの仏米比較ワイン試飲会の結果は、白ワインも赤ワインでもカリフォルニアが勝った。誰がこんな結果を予想出来たろう？審査員は、信じられないものを見たかのように座り込んだ。筆者（タイム誌記者ジョージ・M・テイバー）は自分が聞いたことを確認するために、ギャラガーのもとへ歩み寄り、聞いた。

『赤ワインでも、カリフォルニアが勝ったんですね？』

『そうです』とギャラガーが答えた。

カベルネ・ソーヴィニヨンの試飲では、フランスとカリフォルニアの差はシャルドネに比べて僅差だった。

最高点を1番多く獲得したのは、シャトー・オー・ブリーオンで、3人の審査員が1位にした。また、9人の審査員のうち、7人がフランス・ワインをトップに評価した。

スタッグス・リープも審査員が高得点をつけたが、単独首位にしたのはオデット・カーン（*LA Revue de Vin de France*）誌、および、姉妹誌（*Cuisine et Vins de France*）の編集者）だけ、また、レイモン・オリヴィエ（名門レストラン、ル・グラン・ヴェールールのオーナー・シエフ）は

同点で1位にした。

白ワインとは対照的に、赤ワインでは全体的にフランスの得点の方がカリフォルニアより高かった。上位4位の中にフランスが3本入り、一方、カリフォルニアは下位4位を占めた。

得点をトータルで見ると、かなりの接戦と言える。上位5つのワインの得点差は5:5ポイントしかなく、127:5点を獲得した首位のスタッグス・リープと2位のムートン・ロートシルトの差は1:5点しかない。しかし、昔から言うように「勝ち負け」だ。

スタッグス・リープが勝者であり、これが『パリの審判』である。

ここで「パリの審判」について補足したい。

パリの審判とは、ギリシャ神話の故事にある元祖「美人コンテスト」。

結婚式に招待されなかった「争いの神」エリスが、式場に「最も美しい女神へ」と書いた黄金のリンゴを投げ込んだ。

三人の女神が、それは私のものと喧嘩になり、ゼウスは、トロイアの王子パリスを「選考委員」に指名した。

最初のヘラ（ゼウスの妻）は、「私を選んでくれたら、世界の支配者にしてあげます」と言い寄り、2番目の軍神アテナは、「選んでくれれば、戦えば必ず勝たせてあげます」と迫り、3番目の美の女神アフロディーテは、「世界一の美女を与えます」と約束した。

結局、パリスは、アフロディーテを選び、美女を得た。これが「パリスの審判」である。

この話には続きがある。

その「世界の美女」とは、スパルタの王妃ヘレナで、王様が留守の間に、ヘレナをトロイに連れ帰ってしまった。激怒したスパルタの王様がトロイと戦争をした。トロイとの戦争の間、パリスを憎むヘラとアテナはギリシャ側に肩入れした。

この神話は、多くの画家によって描かれている。三人の裸女とリングを持った男が描いてあったなら、必ず「パリスの審判」であるという。



『パリスの審判』ルーベンス画（1636年） ナショナルギャラリー蔵。
パリス＝黄金の林檐を持つ男はアフロディーテ＝真ん中の女を選んだ。

パリ試飲会後

「赤ワインの試飲結果がアナウンスされた後、オデット・カーンがスパリユアのもとへ足音高く歩み寄った。カーンの体全体から、強烈な個性、優雅な威厳、貴族のような気品がオーラとなつて立ち上がっていた。ワイン専門誌の編集者として

の立場上、この試飲会の重要性や世の中に与えるインパクトを他のどの審査員より敏感に悟つたのだ。

『スパリユアさん、私の採点表を返却していただけませんか？
しょうか？』

『カーンさん、誠に申し訳ありませんが、お返しいたしたかねます』

『でも、わたくしの採点表でございませう？』

『いいえ、カーンさんの採点表ではなく、私の採点表です』
スパリユアとカーンは、採点表が誰のものをかを巡って激しく渡り合った。スパリユアから採点表を取り戻すすべがないことを悟りながらも、カーンは異議を唱えた。スパリユアは採点表の束をアルバイト嬢の手に押し込み、すぐに、アカデミー・デュ・ヴァンへ持つて帰るように言いつけた。

審査員は立ち去り難いのか会場でぶらぶらし、シャンパンを飲みながら試飲結果の話をした。筆者は9人の審査員のうち、5人と話ができた。

審査員の反応は、非常にストレートで、その日試飲したカリフォルニア・ワインを素直に褒めた。カリフォルニアの生産者が意欲的にワインを作っていることは聞いていたが、実際にワインを飲んだ審査員はほとんどいなかった。1976年当時、今から40年前のカリフォルニア・ワインは全く無名だった。今では著名ワイナリーが観光コースなっている。続く。

楽しくマナー ⑧

辻 照子

「テイステイング」

ワインをサーブするマナーにテイステイングがあります。グラスに4分の1程度注いだワインの色、香り、味の順に、まず色を白いクロスで、自然光に近い照明の下で見ます。ワインの色は熟成の度合いを示しており、透き通って輝いているかをチェックします。

ワインの香りは開栓してから変化していき、葡萄そのものの香り（アロマ）、発酵によって形成される香り（第二アロマ）、熟成した香り（ブーケ）の順に鼻に伝わってきます。口に含んだときに感じる香りとの違いが有り、熟成した年代物のワインの場合、殆どブーケの香りになります。グラスを回して空気によく触れさせると、アロマの香りがより加わってきます。

ワインの味は甘味・辛味、酸味、渋味、アルコール分があり、酸味は他の酒とは違うワインの特徴で、酸味の多少は大事な要素で白ワインの糖分や赤ワインのタンニンとのバランスが大切です。渋味の成分をタンニンと云い、葡萄の茎や果皮に含まれ、白ワインにはあまり感じませんが、赤ワインは熟成するに当たってマイルドになります。

味わい方は一口軽く含み、すぐに飲み込まず、舌の上を転がすようにし全体を感じゆつくりと飲み込み、風味を、喉に滑り落ちていった後の舌に残る余韻を味わいます。

赤ワインは若い程赤に青みがかり年を経ることに黄みが入ってきます。紫がかっている若いワイン・ルビー色⇒熟成して2、

5年。ややレンガ色⇒飲み頃。褐色⇒酸化しているので料理に。白ワインは透明から年を経ることに黄金色になります。透明で薄い緑⇒若いワイン。うすい麦わら色⇒これから飲み頃。黄金色⇒飲み頃からやや下り坂。褐色⇒酸化しているの料理に。白ワインで「ソートルヌ」「シャトー・ディケム」「トロッケンペーレン・アウスレーゼ」「貴腐ワイン」「アイスワイン」などはやや褐色していても、もともと糖分が多いために色が濃いのであつて問題はありません。ロゼワインは長く熟成させて味わうワインではないので、きれいなピンク色の時が飲み頃です。

ワインはボトルの中でも熟成し続けていますので、良い状態かどうか見極めるためにテイステイングをしてからサーブします。テイステイングをするのは招いた側か、年配の方もしくは、レストランなどではワインをセレクトした人が皆さんの視線を感じながら行います。色、香り、味、温度、食事との相性を考え、宜しければ軽くうなずきOKをだします。

まず女性のグラスに注ぎ、そして男性のグラス、テイステイングをした人のグラスには最後に注ぎます。

レストランでのテイステイングは注文したワインの状態を確認する為のもので、ワインの試飲や味見ではないので自分の口に合わないからと言って、他のワインに変えることはできません。しかしワインが腐敗や劣化をされていて、不快な味や香りがした時には、ソムリエに確認させ交換してもらいます。

テイステインググラスはワインの色が良く観察できる無色透明で脚付



きのもの、香りがグラスの中に広がるよう縁がやや内側にカーブしてガラスの厚みが薄手のもの。

今回、ワインは白・赤のサンタカローリーナ（チリ）と白でやや甘口のマドンナ（ドイツ）とシヨルジュ、デュアツフ、ボジョレーヌーボー2015（フランス）の4種類のワインを試飲しました。

テリーヌは帆立やハムなどでも、試してみてください。ミックスベジタブルを赤ピーマンとピクルスの代わりに使うとお手軽です。オニオンスープのみじん切り玉ねぎをあらかじめレンジで加熱しておくことによつて炒める時間を短縮する事ができました。紅茶ケーキは紅茶のかわりに抹茶で、抹茶ケーキになります。丸のケーキ型で焼いて生クリームやフルーツでデコレーションすると華やかになります。

*鮭のテリーヌ

材料（4〜6人分）

生鮭 5切（500g） A（塩小1/3 胡椒少々 白ワイン大さじ3） 生クリーム200cc 赤ピーマン40g ピクルス40g
B（マヨネーズ大さじ4 玉ねぎすりおろし大さじ2）
作り方

①鮭は骨と皮を除き、Aとともにフードプロセッサーにかけ、粘りが出て滑らかになったら、生クリームを加えさらにかけ、5mm角に切った赤ピーマンとピクルスを加え混ぜる。

②器に①を入れ空気を抜き、ラップをしてレンジで6〜7分加熱し、冷蔵庫で冷やし、1cm位の厚さに切り混ぜたBを添える。

*オニオンスープ

材料（4〜6人分）

玉ねぎ3個 塩小さじ1 ニンニク1片 コンソメ固形3つ 水5C 塩・胡椒少々 サラダ油大さじ2 フランスパン4〜6切 ナチュラルチーズ4〜6枚 牛脂あれば1個

作り方

①耐熱容器にみじん切りにした玉ねぎを広げ塩をふつてレンジで10分 途中かき混ぜ加熱する。

②鍋に油を熱しみじん切りのニンニクと①を炒め、牛脂を加え10分位中火で炒め、水を加え20分かき混ぜながら煮、冷ましてからコンソメを入れ5分位煮て冷まし、さらに煮て、水分が減ったら水を加え塩・胡椒で味を調え器に注ぐ。

③フランスパンにチーズをのせオーブンで焼き②にのせる。

*紅茶ケーキ

材料（4〜6人分）

ホットケーキミックス200g 卵2個 バター50g 砂糖80g
紅茶ティーパック3袋 牛乳100cc
作り方

①耐熱容器に牛乳と茶葉を入れラップをしてレンジで2〜3分加熱する。

②バターと砂糖を混ぜ、卵を少しずつ加え①を茶葉ごと入れ混ぜ、ホットケーキミックスを加えさっくり混ぜ型に流し180℃のオーブンで30〜40分焼く。

「歴代天皇御製歌」(四十八)

賈名海屋資料館

「順徳天皇」第八十四代・在位一二二〇年(十四歳)―一二三二年(二十五歳)

順徳天皇は、後鳥羽天皇の第二皇子。「承久の変」に敗れ、佐渡に遷られ二十一年間を過された。

順徳天皇の和歌は、千四百首残されている。在位中、鎌倉幕府三代将軍、源実朝の死により、源氏の正統が断絶。僧、慈円の「愚管抄」が出された。「保元物語」「平治物語」、順徳天皇自ら撰された「禁秘御抄」、歌学書「八雲御抄」、後世に残る。

春

もろ人は若菜つむめりかすがなるみかさの森の春のひかりに
のぼりにし春のかすみをしたふとて染むる衣の色もはかなし

夏

夏草はしげりもゆくかいにしへの野中の清水かげくもるなり
かた山のならの葉がしは吹く風の音こそまされ夏は来にけり

秋

袖におくあさけの露のほしもあへず霧にわけゆく秋のたび人
待つ人のこころもしらぬふるさとなほ秋はてぬ蟲の声かな

冬

夜やさむきとよのあかりの冬の月をとめ袖は霜に冴えつゝ、
我身から人のつらさもありやとて心のとがをもとめわびぬる

百人一首 百敷やふるきのきばの忍ぶにもなほあまりある音なりけり

続古今集 春の夜のみじかき夢と聞きしかどながき思ひの醒むるともなし

増鏡 消えかぬる命ぞつらきおなじ世にあるもたのみはかけぬ契あかしを

「歴代天皇御製歌」(四十九)

貫名海屋資料館

「後堀河天皇」第八十六代・在位一二三二年(十歳)―一二三三年(二十一歳)

後堀河天皇は、高倉天皇の第二皇子の後高倉院の第三皇子。

この御代、北条泰時が執権になり、親鸞の「教行信證」、浄土真宗を聞いた。道元が帰朝し、相洞 曹洞宗を伝へた。鎌倉幕府は「貞永式目」を定め、法令を整備した。

和歌の浦葦辺のたづのなく声に夜わたる月のかげぞさびしき 新勅撰集

山の端を分出わけづる月のはつかにも見てこそ人は人をこふなれ 新勅撰集

よそにのみ思ひふりにし年月のむなしき数ぞつもるかひなき 新勅撰集

「歴代天皇御製歌」（五十）

貴名海屋資料館

「後嵯峨天皇」第八十八代・在位一二四二年（二十三歳）―一二四六年（二十七歳）

後嵯峨天皇は、土御門天皇の第七皇子。在位は五年であったが、讓位後は、後深草、龜山天皇の院政を三十年近くとられた。

和歌に長ぜられ、三百四十首ほど残された。

道元が越前に永平寺を開いた。

水辺の螢 山水のたぎりて落つる岩かげに玉ちりまがひ飛ぶほかるかな

夕立 かきくらすそらとも見えず夕立のすぎゆく雲に入日さしつゝ

河夏祓 河辺なるあらぶる神にみそぎして民しづかにと祈るけふかな

維摩会 神無月しぐれふりおける御法とて奈良のみやこに残る言の葉

寄枕述懐 わが肱を枕にしつゝ、思ふかなげにたのしびはこれに過ぎじと

寄笛述階 末の世と思ふもひさしより竹はきりてぞ笛の音をもたてける諺

「氷魚」のことから (181) 岡本八千代

冬至の日来たりて過ぎゆきはや三日今日こそ「氷魚」のこと書かむとす。

なにかしら歌のようになってしまった。どこか子規の楽しむ方を真似してきたかもしれない私。つい、二、三日前のNHKテレビで「この頃、短歌が女性の人たちに人気があつて勉強しようとする人が多くなつた」と知つた。——しかし、それはそれ、「自分がどう勉強してゆこうとするのか」にかかつていると思う。

ここで、NHK出版、坪内稔典著の子規を回想する文を写ししてみる。

「試験があると前二日位に準備にかゝるので其時は机の近辺にある俳書でも何でもことごとく片付けてしまふ。そうして机の上には試験に必要なノートばかり置いてある。そこへ静かに坐を始めて見ると平生乱雑の上にも乱雑を重ねていた机辺が清潔になつていたので何となく心持ちが善い心持が善くて浮きくくすると思うと何だか俳句がのくくくと浮んでくる。ノートを開いて一枚も読まぬ中に十七字一句が出来た。何に書こうもそこらには句帳も半紙も出してないからラムプの笠に書きつけた。又一句出来た。又一句。余り面白さに試験なんどの事は打ち捨ててしまつて、とうくラムプの笠を書きふさげた。(略)——。

と、試験があつても俳句がしきりに浮んでくるという状態で

あつた。そうして、ついにその年(明治25年)の学年試験に落第した。

この落第を機に退学してしまつた。そして明治25年12月1日から日本新聞社に出版社して、ついに子規の学生時代は終わった。

子規の場合、どんな詩心が湧いてくるような気がする。詩をつくる心情の方が強くて、学校を及第せねばという心の方が負けてしまつたのかも。現代の時世から考えると、途中でやめてしまつたことは実に惜しい気がする。

しかし、子規は子規の生き方考え方があつてのこと、彼の時代の彼の運命とでも思う。

現代の現実の私にとつて、歌のための試験もないし、自分の勉強の心がまえさえあれば歌は続けて勉強できるような気がする。つまりこれからの自分はどう生きてゆくかにかかつてゆくのであるうか、とも思う。

子規は自分の考えで勉強してゆくようであるが、常に人との交わりの中で、自分の方向をみつけていった。自から人との交際を求め、好きな人嫌いな人の中にも交わりを求め、しかも楽しむ中の自分を探り求めていった人をつくづくと思われてくる。

子規は自分の寿命を感じていた。子規の「俳句分類」の大仕事はもし長生きしたとしても終わりのない作業だと感じながらもその仕事に取りこんでいった人だ。そして、その大きな仕事の中で「写生」論も生れたのではないか。

虫鳴くや俳句分類の進む夜半。 子規

再び長塚節生家へ(3) 夏目勝弘

今回の目的の一つは節の写生文「我が庭」を節の目と同じ視線で今の庭を見てみたかった。

先づ始めは節が使いやすいように考え作らせた、テーブルの位置から右手の障子を開けて縁側を通し、表庭と裏庭を隔てている塀中門の裏庭に、三株の老梅が見えると、しかし今は書院前に一株が苔むしジンのみの一間余りの枯れた幹が書院に向かい伸びているのみ。

肉桂ニッケイと南天の植込みは見落したかも、繁りたち森となった上方のみに気をとられていた。

節は平氏門と書いているが、広辞苑には塀中門ヘイチュウモンとある(表庭との境の塀の中間にある門)。

たしかな造りで今に存在感を漂よわせている門である。この門を造った大工は、いつもボロドテラを引っかけている。仲間には聞こえた本所堅川の亀という、酒と女の好きな始末に終えない奴で、門の建まへを組立てる頃に、いつもの癖で居なくなつたと記してある。(さて庭といっても平凡名庭をどんなに説明したものであらず、先づ自分の位置を定めねばなるまい)。

いつもテーブルの置いてある所から前の障子を明け、そして右手の障子を明け写生してゆく、先づ書院の左手から写生を始める。

南は塀と塀中門とで前庭と奥庭とを隔てているのは今もかわり無い、三株の老梅ももちろんない、今そこから見えるは、大木とよつた松と樅の太い幹のみが森となつた、薄暗いなかでは、松なのか樅なのか判別がつかない、ただ太い幹が乱立しているのみ。

肉桂の木があつたとあるが、上ばり見ていて見落したのかもしれない。

ない。(西の障子を開けたら今まで妻想ひになつていた男猫が逃げ行つてしまつた)と。

その西の障子を開けた所より見ると、植木屋の自慢の鎧の威の袖垣と、その下に客が手水を使うようにこしらえた竹の棚が白ざれてまだあるが、当時のものかどうかは知らない。

袖垣の側のカリンの木は太いゴツゴツとした幹が二メートル余りで折れたのが、その太い幹の下より出たヒコバエが幹となつた。

カリンの横に(青桐が五六本あしらつてあるのが心持よい)とあるが、青桐はない。

庭の中心である築山も今は森のなかの少し土の盛り上がつている小山に落葉が厚く積つて築山の体をなしていない。

築山から植込かけて、心字の池があるが、水はなく松葉が敷きつめてあつたとある。

植込は今もそのまま有り、その配置から心字の池の形は読みとれるが、池の形さえわからぬほどに落葉が厚く厚く積もり、百余年の時間の流れをつくづくと感じた。

築山の背に立つ樅の木の数本の太い幹が薄暖い木々の間に太い幹のみが見えるのみ。

ドウダンがそのなかに一本交っていたとあるが、ドウダンかどうかはわからないが一本の紅葉した木が暗い空間に彩りを添えている。

肉眼で見える物は、すべて変化し無くなつてゆくのが常であるが、節の日々見ていた庭を巻もどし百余年前の庭、晩秋の青空のもとではし思いのなかで再現させていた。

この奥庭に立ち諸行無常の文字が自と浮んできた。

この庭もいつかは無くなつてしまうことは間違いないことである。しかし長塚節の御霊は今もこれからも生きつづけ、還えられる場所が今はある。

ことのはスケッチ (446) 今泉 由利

『天田愚庵』 つづき③

天田愚庵 「西国三十三所巡礼」

- 「先ず伊勢に詣で、次に熊野三社、然る後は一番より番号に従い。
- 「二箇所にて夜づつ、参籠通夜をする。
- 「札所の外にも、神仏霊場、名山大川、最寄に従い、参詣すること。
- 「道中は漫りに舟、車、馬、駕籠に乗り、巡礼の本意を失うべからざるべし。

表には、奉納 西国三十三所 為父母菩提裏には、南無大慈大悲観世音菩薩

この三十三枚を、緒を貫きて胸元にかけて。笠は深網代。檜の撞木杖。

林丘寺の師（由利滴水）に御暇乞。三条より加茂河堤に行く。

比叡山越し、近江へ。伊勢の皇廟に参詣ののち、熊野路に向かう。

熊野川に沿って上る。川合、敷屋、津賀…を経て、請川に。湯峯（熊野の温泉場）洗濯もし、湯治もし、熊野本宮大社に参籠せんとす。

湯峯より音無川、熊野川に入る。

心身は無垢清浄光、天気は恵日破諸闇。今日こそ。本宮より川船にのる。

熊野連玉神社、神倉神社に詣つ。飛鳥神社に詣で、丹敷神社、普陀落寺、これより那智。坂下の鳥居より御社へ石の階段、坂の両側には老杉が立ち、熊野夫須美神社。

那智山普照殿 「青岸渡寺」。

底つ巖根つき貫きて普陀落や、那落も掛け那智の大滝

那智川の滝、石英班岩の断崖百三十Mの岩の上より落ち、滝壺には近寄ることは出来ず

飛滝神社の拝殿に息しのち、蔦葛の険しい岩根を登り、大滝の上流に出、水源をさかのぼり、二の滝に至る。さらに三の滝あり。この辺り黒文字という香わしい木が多く、木を取り杖を作る。

大滝の上の落口に至る。巖角にすがり下を見おろした。

これまでの記術より、私、正月休みを、まず、京都、産寧坂の「愚庵」あとよりはじめ、「那智の滝」への旅をした。

愚庵さんみたいに、黒文字の杖について、熊野古道を歩き、いつどこ生まれの石なのか石に尋ねつつ石畳をゆき、青岩渡寺、那智の滝に辿り着いた。

消えない虹を供なった神滝、その注連縄の滝口に、巖にすがり身をのり出された愚庵さんを偲んだ。 つづく

編集室だより【二〇一五年 十二月】

三河アララギ賞 白井信昭様

満月のだあれもゐない音羽川水面の月にいなだの群れは

故郷の今を昔を地道に訪ねられ、探しだし、心地良い短歌になりました。これからも益々ご自身を詠まれますよう。

○巢鴨地域創造館に於て。

東京域北、王子辺り、かつて石神井川が流れていた。この川はよく氾濫するため、太田道灌の時代に、王子台地の真中に新たな水路をつくり、音無川となり隅田川に流れ込む。地域の、「どうだったのだろう！」を播いている会、興味深い。もつと知りたくなります。

○そして吟するは。

短歌 太田道灌作 露おかぬ

「露おかぬかたもありけり夕立のそらより広き武蔵野の原」

○新宿御苑吟行。

雨であろうか、風、嵐…ありのままに助けられて句作をする。公孫樹に吹きあげる強風はまさに風神の大仕事、天も地も、黄金色の渦。恐竜の頃より地球に栄える公孫樹に、心を奪われた。

○仏像彫刻クラスの忘年会は、アートホテルズ大森で。

海の物、山の物、酒類、甘味類…もう本当に見事に食事が美味しく、地道な仏像彫刻には似合わなかったが、一年の良い締め括りでした。

○京橋「ギャラリーくぼた」。

俳句のお仲間、吉田樹海さんの「ぐるうぶいままあじゆ展」。「冬木の白樺林のむこうに山々が透ける」穏やかな御作に心なりました。

○金閣・鹿苑寺にゆく。

お釈迦様の舍利をまつた舍利殿が、身も心も、「ハツ」としてしまふ美しさ。本当にすごいところだと思う。とてもとても元気になってしまふ。

○わら天神宮（敷地神社）

木花開耶姫命を主祭神。木花開耶姫命は、北山天神丘に古代より祭られていたが、足利義満の金閣寺造営のさい、鎮守神として遷座された。神社内、いたるところ「わら」が祭られ安心する。

○和楽膳・^{いっしょうまい}二兆米、寿司、湯豆腐、スッポンなど。京都で活躍する建築家の友人に案内していただいた。

「ここは何だろう」と思いつつ入る。街道を走り続ける78才の板前大将の和食料理店だった。北山杉の三段のカウンター、寿司、割烹、スッポン…を走る途中のひと休みに経営しておられるとか。広い範囲のユーモアたっぷりのお話にひき込まれる。わら神社の祭礼の奉納弓取式をする丸竹のままの「弓」は欄間に飾られ、ドキドキしてしまふ。

お話しと料理の末、ワイングラスにスッポンの「血」をいただいたのでした。

和菓子街道 (112)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

姫街道(8)

気賀宿みそまん紀行第二弾は、創業は明治18年（1885）で、気賀の中で一番の老舗菓子屋、外山本店だ。気賀の宿場町の入口となる四ツ角で姫街道から離れて、引佐町方面に少しいったところに店を構える外山本店は、現当主で六代目だとか。

こちらのみそまん（商品名は「みそ万十」）、山芋が入っているせいか、むっちり、しっとりとした皮で、色は若干薄めながら黒糖の香りが際立っている。表面には屋号の焼き印が押されている。

皮のしっかりとした甘さに対して、中の餡はさらっとしているもの、中の餡は甘さを引き立てる塩を強めに効かせてあるためかなりコクがある。小ぶりではあるが、餡がぎっしり詰まっていて、食べ応えがある。

熱いお茶によく合う、正統派まんじゅうだ。

店の近くに、小学校がある。みそまんは気賀の子供たちにとってはふるさとの味なのだろうなと、学校帰りの子供たちに手を振りながら思った。



◆外山本店

住所：静岡県浜松市北区細江町気賀68-2

電話：053-522-0172

お知らせ

△三月号の原稿は、一月三十日(土)までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、返却用封筒に切手をはり、毎月原稿に同封して下さい。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の一六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができません。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―一六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yur188@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美